商家の並ぶ・本町　たんけんポイントの説明

平成 18 年 3 月版 / NPO 法人小諸町並み研究会

★たんけんマップで番号の場所をみてください。

昔はここには、砂糖、粉、缶詰などを売る大きなお店がありました。道の角の権兵衛の店なので「角権」を屋号とし、江戸時代は庄屋（町のまとめ役）もつとめ、藩の仕事に協力していました。明治には、小諸義塾の設立などに力をつくしたということです。「いい品物を、大量に、安く」という商売で、信州はもとより他県にまで名が知られる豪商でした。角権は、昭和 20 年ごろ店を閉じました。

2　もと大塚酒店（建物のとし / 80 才くらい / 大正時代）

大塚酒造の小売り部として、大正時代につくられた建物です。今でも、いろいろなお酒の名を書いた大きな看板が並んでいます。昔は「角の大塚」と呼ばれていました。

3　田中ちょうちん屋（建物のとし / だいたい 260 才くらい / 江戸中期）

この家は、今から 260 年前、江戸の中ごろに建てられたと伝えられるとても古い建物です。その昔は宿屋でしたが、明治時代からちょうちん屋をはじめ、今でもここのおじさんは伝統の技を受けつぐ、ちょうちんづくりの名人です。
本町は寛保２年（1742 年）の大洪水で、建物が全部流れてしまいました。この建物は、その時に古材を集めて建て直したそうです。

4　武重医院（写真は、昔の建物）

昔の武重医院の建物は、大正５年につくられた、しゃれたデザインの洋館でした。
昭和 62 年までここにありました。

5　北国街道ほんまち町屋館（もと清水屋）（建物のとし / 83 才 / 大正 12 年）

もとは味噌や醤油をつくって売っていた清水屋の建物です。「町屋」というのは、図のように、表通りから「お店→中庭→蔵」とならんでいる建物の建て方で、本町通りの家は、昔はみんな町屋でした。町屋館は、その伝統的な建て方をみな

さんに見てもらうための施設です。
昔の清水屋には、味噌や醤油をつくって保存しておくために奥のほうにいくつもの蔵がありました。そして蔵から味噌などを表の通りに運ぶために、トロッコがつけられていました。今でも、トロッコの線路が店の土間に残っているので見てください。
大正 12 年につくられたこの建物は、いかにも大正の建物らしい大きな主屋で、店先も広々としています。表に面したガラス戸、格子、腰壁も、大正時代にはやったモダンなデザインです。
主屋の外壁は、本来は黄色味がかった土壁でした。
わきにある門は、最近新しくつくったもので、昔は背の低い建物が並んでいました。

6　江戸時代の北国街道と道標

この本町通りは、江戸時代の北国街道で、江戸から日本海側をむすぶ大事な道でした。善光寺街道とも呼ばれ、加賀百万石の参勤交代の通り道であり、佐渡の金を運ぶ道でもあったのです。
町屋館の前に建っているこの道標には、「上り・田中宿へ二里半、下り・追分宿へ三里半」と書かれています。江戸時代は京都が上りだったので、日本海側から北陸道を通って京都にいく方向が上りだったのです。一里は、だいたい４ｋｍです。

7　大塚本店（建物のとし / 227 才 / 江戸後期）

江戸時代の中ごろからの造り酒屋（お酒をつくって売る店）です。馬場裏通りを渡ったむこうがわにお酒の工場があります。
本町の古い町屋の典型といえる建物です。立派な庭と、家の中の田の字型の間取りから、格式の高さがうかがえます。昭和のはじめにお店の改装で、ショウウインドウや、腰壁のある格子窓をつけました。きっと当時はやっていたデザインだったでしょう。裏に土蔵があり、馬場裏の酒造蔵につながっています。
お店の建物は、江戸時代の建物なので二階がとても低くなっています。江戸時代、本町通りは江戸を行き来するお殿様が通る道だったので、お殿様を上から見おろしては失礼だということで、二階には部屋をつくらなかったといいます。
主屋の裏には、約 190 年前の蔵があります。馬場裏通りをは

さんだむこう側にも、酒蔵が並んでいて「浅間獄」「献寿」などの名前のお酒をつくっています。

8　塩川五右衛門（建物のとし / 264 才 / 江戸後期）

この家は、江戸時代に本町のまとめ役である「庄屋」をつとめていた家です。殿様からとても信頼されていたので、江戸時代から明治時代にかわる時に、小諸城の鉄砲を殿様からあずかり、その後は鉄砲屋をやっていました。
建物の主屋は、1742 年（江戸中期）頃のものと言われています。店の中は、町屋の特徴である「主屋→中庭→土蔵」の関係がよく保たれています。
もとは隣の薬局と一体のとても間口の広い町屋で、たくさんの人が住み込んで働いていました。
格式の高いお座敷と美しい中庭があり、奥には４棟の土蔵があります。
二階は天井の低い「厨子二階」で、主屋のまん中には天窓のある吹き抜けがあります。
古くはここが小諸宿の本陣でしたが、江戸中期の寛保の大洪水に本町がほぼ流されたため、本陣は市町に移り、それ以降は庄屋となりました。

9　元大塚魚店（建物のとし / だいたい 200 才〜150 才くらい / 江戸後期）

江戸時代の建物なので、二階が低いのがよくわかります。
昔は、広く商いをする魚、海産物の店で、店の中にはタイルを貼った昭和 24 年の冷蔵庫室が残っています。
建物は、広い間口を持つ江戸時代の家で、２階の軒下に屋根を支える骨組みの木（登り梁）の切り口を見せているのが特徴です。昔の大工さんは、こういうところに凝ったのです。

10　馬場裏 / 城内と町人地をわける石垣

この通りは、江戸時代は武家地内であり、「新馬場」という馬場（武士の乗馬の訓練場）がありました。本町との間の駐車場などにみられる石垣は、武家地と町人地の境の石垣です。
明治時代に、馬場裏の奥に住んでいた小説家・島崎藤村は、よくこの通りを通って、鹿島町にある揚羽屋に通ったということです。**（島崎藤村は明治時代に、この場所のことを本に書いています）**

「私は外出した序に時々立ち寄って焚火にあてて貰ふ家がある。鹿島神社の横手に、一ぜんめし、お休處、揚羽屋とした看板の出してあるのがそれだ。私が自分の家から、その一ぜんめし屋まで行く間には大分知った顔に逢ふ。馬場裏の往来に近く、南向きの日あたりの好い障子のところに男や女の弟子をして石菖蒲、萬年青などの青い葉に目を樂ませながらせっせと着物をこしらえる仕立屋がいる。すこし行くと、カステラや羊羹を店頭に並べて売る菓子屋の夫婦が居る。千曲川の方から投網を下げてよく帰ってくる髪の長い売卜者が居る。」（島崎藤村「千曲川のスケッチ」より）

11　大塚酒造の酒蔵（お酒をつくっているところ）

大塚酒造のお店は、本町に面しています。そこから奥に蔵が並び、馬場裏をはさんで酒造り工場の蔵があります。一番大きな蔵の２階が、「酒蔵資料館」になっていて、酒造りの道具やめずらしい盃などが見られます。

＊大塚酒造酒蔵資料館の案内

日曜祭日は休み、時間 8：30～5：00、入館無料（予約してからきてください）

12　結城神社（大塚酒造の屋敷神）

日本の古い家では、たいてい敷地の中に「屋敷神様」を持ち、家の守り神としてあがめ、供え物等をして大切にしています。この大塚家では、本町にあった屋敷神様を大正８年４月にこの地に移築し、祖先の出身地が茨城県の結城であったので「結城神社」として祭りました。

酒造りをしているので、酒の神様である「松尾の神様」もここにいっしょに祭ってあります。

このケヤキの木は樹齢300 年以上のものなので、江戸時代中期、ここがまだ武家地だった頃からここに立っていたということになります。

13　藤村の井戸

明治32 年から小諸に暮らした島崎藤村夫妻が、毎日、水を汲みに来た井戸です。その頃は、ロープと桶で水を汲み上げるつるべ井戸だったそうです。

「信州の小諸で暮らした７年間のことを考えてみても、先ず自分の胸に浮かんで来るのは、あの小諸の住居の近くにあった井戸端です。」と、島崎藤村は書いています。

お嬢さん育ちであった冬子夫人が、てぬぐいを頭にかぶっ

て着物をしりっぱしょりして、つるべ井戸から水を手桶けに水を汲んで、桶をさげて持ち帰る姿を、近所の人は毎日見ていました。冬子さんも、近所の人との井戸端会議の輪にはいっていたということです。

「夜の九時過に、馬場裏の提灯はまだ宵の口のやうに光った。組合の人達は、仕立屋や質屋の前あたりに集まって涼みがてら祭の噂をした。此の夜は星の姿を見ることが出来なかった。螢は暗い流れの方から迷ってきて、町中を飛んで、青い美しい光を放った。」（島崎藤村「千曲川のスケッチ」より）

14　島崎藤村が住んでいたところ

小諸にいた７年間、藤村はこの奥の小さな家に家族と暮らしていました。藤村が住んでいた建物は今はなく、佐久市の貞祥寺に移築されています。藤村は自分の住まいのことを、次のように書いています。

「わたしの馬場裏に借りた家は、古い士族屋敷の跡、二棟続いた草茸屋根の平家で、壁一枚へだてて近在の小学校へ通う校長の家族が住んでいた。　付近には質屋や仕立屋などがあり、家の裏側の細い水の流れをへだてて水車小屋の見えるようなところだったが、小諸本町には近く、しかも割合に閑静な位置ではあった。」（「雲」より）

家賃は３円、月給ははじめ３０円ぐらいであったそうです。その家のつづきの畑を借りて野菜を作り、簡素な生活をおくっていたようです。藤村の家があった場所の入口には、作家・有島生馬の字で「藤村舊栖地」の碑が建てられています。

「島崎藤村」と「小諸義塾」

島崎藤村は、明治時代に日本の自然主義文学を完成させた詩人であり小説家です。木曽に生まれ東京の大学を出ましたが、明治 32 年に、旧師・木村熊二の招きで、「小諸義塾」に英語・国語教師として赴任しました。この年、冬子と結婚。翌年は長女 緑が生まれました。明治 38 年に小諸義塾を辞めるまで、７年間を小諸で過ごしました。小諸にいる間に書きためた散文「千曲川のスケッチ」には、この地方の美しい風景や素朴な人々とのふれあいが描かれ、ここでつくられた「小諸旅情の詩」は日本中で愛され、全国に小諸の地名を広めました。この学校は、明治 26 年に木村熊二という人が開いた学校です。木村熊二は、明治２年にアメリカに留学し、

様々な学問を身につけ、帰国後はキリスト教の伝導をおこなっていました。その後、木村が佐久に来た時、小諸にも小学校以上の学校が必要であると考えていた小諸の青年・小山太郎が、小諸に学校をつくってくれるように木村に頼みました。木村はその前に明治学院で教師をしており、その時の教え子に島崎藤村がいました。他にもすばらしい教師を東京から呼び寄せ、生徒54名に先生７名で授業をしておりました。
小諸義塾は、明治39年まで13年間続き、藤村はここで７年間、英語と国語を教えました。
授業の中で、仏陀の生涯を語ったり、小説家として生きようとする自分自身の決意を語ったりしたそうです。

15　そば七（建物のとし / だいたい 200 才ー150 才 / 江戸後期）

江戸時代に料亭として建てられた建物で、入口の立派な門が特徴です。
緑豊かな庭を活かしたお店は、ともていい雰囲気で、店の天井には昭和になってつけられた明かり取りが見られます。
今の店主が「ここをなんとか残したい」と空家だった建物を借りて、自力で改装して、土日にそば屋をやるようになったのが平成８年です。今では、さまざまな催しにも使われ、まちおこしの拠点のひとつとなっています。
入口の門は、1806年頃のものと伝えられ、当時はやった松や鳥が彫られています。建物の中は、塩川五右衛門商店によく似て、店から奥まで３つの部屋が並んでいて、真ん中は吹き抜けです。近代で、大幅な改造が行われています。

16　夢屋古美術店(建物のとし / だいたい 200 才ー150 才くらい / 江戸後期）

この建物は、隣のそば七とつながっています。江戸時代の建物なので、やはり二階が低いです。
最近、骨董屋さんが入って、いろいろな昔のものが並んでいてとても楽しいお店です。

17　「大和屋呉服店」があったところ

昔は、「大和屋」という大きな着物を売るお店（呉服屋さん）がありました。
商売がじょうずなことで有名で、明治時代には長野県内の多くの呉服屋さんの子どもはここで商売の見習い（丁稚奉公）をしたそうです。つらい奉公にたえて一人前になっていっ

たそうです。そんな丁稚さんやお店で働く人が、多い時で50人もお店で暮らしていたといいます。
また、店の奥には商品や食べ物、道具をしまっておく蔵が18もあったそうです。
かつては小諸の豪商の代表と言われた大和屋は、県外にも名のしれた呉服問屋でした。
明治時代、小諸の大和屋で丁稚を仕上げてきたというのが県下の商人の勲章になったといいます。作曲家、中山晋平も一時ここで丁稚をしていました。また、明治の小説家、島崎藤村の作品には大和屋の東沢の別荘に招かれた話が出ています。大和屋は、昭和58年頃に店をとじました。

18　大和屋紙店（建物のとし / だいたい 120 才くらい / 明治初期）

江戸時代からここで紙や筆を売っているお店です。建物の表側は新しいデザインに見えますが、中は古いりっぱな建物です。裏にはいくつかの蔵が並び、とても美しい中庭があります。
紙店は 160 年前から続く老舗で、さまざまな紙を扱っています。

19　旧大和屋呉服店の土蔵（建物のとし / だいたい 100 才くらい / 明治後期）

道に面した蔵と、うしろの英語塾は、昔の大和屋呉服店の蔵です。
蔵というのは、中のだいじなものを火事から守るために、土で塗り固めた建物です。昔は子どもが悪いことをすると、蔵の中に閉じこめておしおきをしました。

20　萬屋骨董店 / 小諸銀行として立てられた建物（建物のとし / 111 才 / 明治 28 年）

この建物は、ほかと少しデザインがちがっています。ほかの古い建物はみんな開かれたお店なのに、この建物は入り口が狭いです。それは、この建物が明治時代に銀行とし建てられたからです。旧小諸銀行は、明治14年に小諸の豪商が力を合わせ開いた銀行で、その後こんな立派な建物を建てました。建物全体が土壁で塗られている建物を「蔵づくり」といいますが、火事にあっても燃えない建物です。また建物の両側に壁がとびだしていますが、これは「うだつ」といい、火事がまわりから燃えうつるのを防ぐ役目をします。これは１階か

ら立ち上げているので「袖うだつ」と呼ばれます。
うだつはお金持ちであることを示すものです。昔は、成功した人を「うだつがあがる」、ぱっとしないと「うだつがあがらない」といいました。この建物の左の建物も「うだつがあがって」いるので、見てください。
店の２階からは、広い中庭や奥の蔵が見られます。めずしい骨董品とともに、伝統的な建物も楽しめる店です。
窓には、戦争の時に供出で切られた鉄格子の跡が見られます。
＊供出＝戦争中は、兵器をつくるために日本中から鉄が集められました。

21　大塚味噌醤油屋（建物のとし / 店はだいたい 200 才〜150 才 / 江戸後期）

（蔵は、だいたい 80 才くらい / 大正時代）
お店の横に蔵がくっついているのを、「袖蔵」といいます。
この店の袖蔵には、黒い漆喰でりっぱな看板がつくられています。昔の左官屋（壁塗り職人）は、このようなコテ（塗る道具）の技が腕のみせどころだったのです。
主屋の奥には、醤油づくりのための大きな蔵が建っています。
建物の中は、昔のままの美しいお座敷と中庭が手入れされて残っています。

22　つるやホテル（つるや旅館）

1682 年（江戸中期）からここで旅籠を営んでいる老舗。明治時代も、商用や公用で来た多くの客でにぎわいました。文化人の泊まり客も多く、小諸義塾の先生だった島崎藤村、円山晩霞（画家）などに会いにきた画学生などが１ヶ月も泊まり込み、宿賃が払えなくなったという話ものこっています。
平成４年に、ビルを建て「ホテル」として新装オープンしました。

23　「六供」という名前はなぜついたか

この道は、つきあたりにあるのが成就寺参道で、「大門小路」と呼ばれます。
江戸時代は、成就寺から今の「かっぱ天国」という店のところまで、成就寺に属する６つの坊（小寺）があったことから、六供の名がつきました。大門小路の右側は、同心（下級役人）の屋敷が並んでいました。この参道には、むかしは料理屋や飲み屋などがならんでいたそうです。

24　つたや旅館（建物のとし / だいたい 85 才くらい / 大正時代）

「つたや」が旅館をはじめたのは、江戸時代の中ごろ、今から 344 年前です。
この建物は85年くらい前に建てられたもので、大正の雰囲気を伝えるモダンなデザインです。
江戸時代～昭和のはじめまで、商人宿としてたいそうにぎわった宿屋です。俳人の高浜虚子が滞在したこともあり、各部屋には小説家や書家の書き残した書などが飾られています。
道の拡幅で表の軒が切られてしまったのが残念ですが、建物をぐるりとかこむ塀がいい雰囲気です。

25　結城屋（建物のとし / だいたい 200 才〜150 才 / 江戸後期）

この店は、江戸時代の町屋の形をよく残しています。本町のほかの古い店よりも１階のひさしが前に出ています。ほんとうは他の店も、全部このくらい深いひさし（１階の屋根）が出ていたのですが、昭和 33 年に道路を広げる時にちょんぎってしまいました。この家は、建物全体をうしろに引いたのでひさしが昔のまま出ています。
昔の町並みは、こんな深いひさしがつながっていました。ひさしは、雨やどりや日よけにもなり、いいところがたくさんあります。
また、表からは見えませんが、店の奥の中庭、明かりとりの天窓、箱階段など、広くない敷地をじょうずにつかう知恵がいっぱいです。
結城屋は、戦前には金庫、馬具、たばこ、荒物、履物など、戦後は、下駄・草履を中心に商っていました。

26　光岳寺の門（建物のとし / 241 才 / 江戸中期）

この門は、奥にある光岳寺の入り口の門です。もともとは江戸時代に小諸城の足柄門としてつくられたのですが、明治のはじめにここに移してお寺の門にしました。江戸時代が終わって城の役目がなくなった時に、城の中のいろいろな建物がまちの人に売られたそうです。
この門は、正面両側の柱に小さな屋根が乗っているデザインが特徴です。

27　光岳寺（建物のとし / だいたい 300 才〜250 才 / 江戸中期）

徳川家康の母の「お大の方（伝通院）」をとむらうために、江戸時代の初めころの小諸城主・松平憲良が、1624 年に建てた寺です。憲良のおじいさんと徳川家康が兄弟だったので、ひ孫の憲良もお大の方の位牌を預かっていたのです。その位牌は、今も本堂にまつられています。
また小諸城の中にあった牧野家（江戸時代中期〜明治までの小諸藩主）も、明治になりこの寺でまつるようになりました。そのため、本堂の屋根には、徳川家、松平家、牧野家の３つの紋（家のしるし）がかかげられています。
本堂、山門（楼門）ともに、江戸時代中期のものと思われます。りっぱな楼門は、小諸城下ではひとつしかない二階建ての門です。

28　成田山

成田山は光岳寺の境内にある神社です。昭和初期までは、の毎月末の市で、その参道である本町通りは大いににぎわったということです。今でも大晦日には、二年参りの人でにぎわいます。

29　成就寺

もともと、平安時代のはじめころからお寺があったのですが、戦国時代に大井伊賀守光忠が今の本町の下のほうに鍋蓋城を築いた時、この寺を城の鬼門の守りとして成就寺--「城に就く（従う）寺」と改名しました。そしてこの寺までの参道に、６つのお供の寺（六坊）をつくりました。1504 年のことです。そこから、「六供」の地名が生まれました。
その後、参道沿いに飲屋などが並び、町人の息抜きの場となっていきました。
池のある境内は、五月にはシャクヤクの名所となります。
戦時中は、作曲家の小林亜生さんが、この寺に疎開していました。
＊鬼門というのは、昔から縁起がよくないと言われている方角です。

30　「純水館」あと（日本で最初の民間製糸工場あと）

空き地の上に見える蔵のような建物は、製糸工場の跡です。ここには、日本で最初の民営の工場として、明治６年に丸万製糸工場が開業しました。

その後、経営者が二度変わって、はじめは「浅岳社」、明治26年からは「純水館」という名前の製糸工場になりました。この純水館は、小諸市内の５つの工場を持っていました。この工場の糸は、世界大博覧会で金賞をとるほどの質の良い糸を製造し、小諸を生糸の都としても有名にしていきました。本町の市の立つ日には、純水館の女工さんがたくさん買い物にきてにぎやかだったそうです。

31　六供の清水

中沢川に面して、湧き水がこんこんと流れ出ているところです。

最近は川の水がきれいになり、ときどき岸辺にホタルも舞うそうです。

横に水神があり、戦前までは、９月 10 日に水神祭が行われていました。この日は、六供の全部の家に四角の灯ろうが配られて、それぞれに絵を書いて道の角に置いてろうそくを灯し、きれいだったそうです。大人は、みんなで集まってお酒を飲んだりしたそうです。

水道が普及していない頃は、近所のおかみさんたちがここに集まり、順番を待ちながらうわさ話に花を咲かせたそうです。「女姓は清水いきゃあ帰らねえ」と、だんなさんに言われたということです。弟、妹を背負った子どもたちも。水汲みやランプのホヤを磨きにここに集まったそうです。（大正時代の話）

32　健速神社（建物のとし / 271 才 / 江戸中期）

この神社の歴史はたいへんに古く、城下町がつくられる前から田町の一本松にあったそうです。
今の場所に移ったのは江戸初期の 1675 年です。
境内には、樹齢350～400 年のケヤキのご神木が天をおおうようにそびえています。トタンの建物の中をのぞくと、中にとてもりっぱな本殿が見えます。
◇この神社は祇園様をまつる神社で、明治時代より前には祇園宮と呼ばれていました。この神社のお祭りの祇園祭は小諸でもっともにぎやかな伝統行事で、神輿が境内を練ってから階段を下っていく姿はとても迫力があります。

33　祇園祭（健速神社例祭 / ７月 13 日）

城下町の夏の疫病よけや雨乞い（ひでりの時の雨をふらせる祈り）として始まり、今では小諸の各地区から神輿が出る市民祭の中心に位置付けられています。本町が中心となる祭りで、「本神輿」と呼ばれるのは小諸では町屋館に飾られているものひとつだけです。この神輿は江戸時代（1811 年）につくられました。（お祭りはもっと前からありました）六角のりっぱな神輿で、黒いうるしがぬってあります。神社の氏子（この神社に守られている町の家）である本町、六供、田町の若者が神輿のかつぎ手となり、町内を練り歩きます。時にはけが人も出るような真剣な祭です。子どもたちは、子ども神輿をかついで地区を回ります。
この祭は、映画「男はつらいよ・小諸編」のタイトルバックを飾りました。

34　神輿橋(橋のとし / だいたい７５才くらい / 昭和初期）

お神輿が通るので、この名前がつきました。昔の橋は、とてもきれいなものが多いのですが、この橋はとくにていねいに造られた美しい橋です。橋の下のアーチや石垣も古いもので、大事にしたい風景です。

35　常盤橋と権兵衛坂

昭和３年にできた橋で、モダンなデザインです。以前は、橋の欄干に電気の明かりがともっていたそうです。橋の下のアーチもとてもきれいです。このあたりの川の石組みは、とても古いもので、その雰囲気もとてもいいです。

また本町から橋までの道を、権兵衛坂といいます。小諸城をつくった仙石権兵衛秀久が、健速神社や馬場に行くときに通ったからこの名がついたという説と、角屋権兵衛さんの家の横の道だからだという説があります。坂の上からの浅間山の眺め、田町の家並みはとてもきれいです。

36　丁子庵（建物のとし / 116 才 / 明治 18 年）

丁子庵は、今はそば屋で有名ですが、昔は米、小麦、豆などを売る店として有名でした。

建物は、明治時代に人気のあった黒い漆喰でしあげをした蔵づくりです。総ケヤキ造りの店内は落ち着いた雰囲気で、映画「男はつらいよ」の撮影にも使われました。

本町通りの建物は、昭和 33 年に道路を広げた時にひさしを切ってしまいましたが、この店は奥まっているのでひさしがそのまま残り、いい雰囲気をつくっています。

このお店の前の通りは、江戸時代の北国街道で、国道をはさんで向こう側に続いています。